現代ハワイにおける多民族ローカル文学の行方

臼井　雅美
（同志社大学文学部英文学科）

韓国日本文化学会　2002 年度　春季　国際学会大会
「文化活動における多文化受容の問題」

2002 年 4 月 26 日
韓南大学校　文科大学

KCI

I.　はじめに

世界的観光のメッカである現代のハワイにおいて、1970 年代に本格的に構築され始めた多民族によるローカル文学が 21 世紀を迎えて大きな転換期に直面している。アメリカ文学のカノンからも、それぞれの出身国の文学からも逸脱した現代ハワイのローカル文学は、プランテーション時代の文化遺産であるピジン英語という共通語により、ハワイアン、ポルトガル系、中国系、日系、韓国系、フィリピン系、プルトリコ系等の多民族により構築されたハワイ独自の生活、文化、社会を表現する文学である。その文学構築の運動は、アメリカ本土（Mainland）中心主義、さらにはグローバリゼイションの結果もたらされたハワイが抱える世界的観光業と商業主義、アメリカ本土中心のアメリカ文壇や出版業界、ハワイの中にあるアメリカ本土を象徴するハワイ大学への挑戦であった。

現代ハワイにおけるローカル文学のルネッサンスは、三世を中心にホノルルでおこる。

1970 年代後半の Talk Story Conference の開催から Bamboo Ridge Press の設立を堺に、ローカル文学が明確に定義され、詩、小説、演劇における創作活動として発展し今日に至る。19 世紀に始まる砂糖黍産業の繁栄に伴って確立されたプランテーションにおいて民族別に隔離されていた移民労働者が、二世から四世あるいは五世へと世代交代を繰り返し、20 世紀後半にはハワイを共通のホームとしたローカリズムが勃興する。一世の様々な母語からプランテーションでの共通語としてのピジン英語が生まれ、アメリカ合衆国によるアメリカ化と英語化運動によって二世以降は標準英語を教育の場で強要されることとなる。何世代かを含む家族の中で話す言語が、母語、クレオール英語、ピジン英語、さらにはテレビ世代の標準英語というように多岐に渡り、その多様性は文化変容にも見られるようになってきた。そのハワイ独自の文化変容を表象する鏡の一つが、ローカル文学である。

ハワイにおける文化変容は、ハワイ諸島という孤立した空間において様々な民族の独自性を維持しながら、ハワイ独自の文化・言語体系を共通項として確立させていったことを意味する。一世が母語で祖国への郷愁の念や初期の移民生活の葛藤を描いた一方で、二世の多くは英語により世代間やコミュニティー、広くはハワイ諸島の問題と変遷を描いた。さらに、三世や四世になるとハワイが直面する精神的コロニアリズムを、一世が体験した第三世界から現代の第三世界に至るまでのボーダレスな空間において構築してきた。

現代のローカル文学の場には、あくまで一貫してローカル・テーマとピジン英語にこだわる Darrell Lum や Eric Chock が活躍する一方で、ハワイにこだわりながらも伝統的アメリカ詩を全米に発信する力を持つ Cathy Song から、Lois-Ann Yamanaka や Nora Okja Keller などポスト・コロニアルなテーマをハワイという土壌で追求して本土の大手出版社から小説を発表する作家までが、ローカリズムにこだわった活動をしている。さらに、多大な影響力をすでに持ってしまった上記の作家たちを中心とする Bamboo Ridge に対して、ピジン・ゲリラとしてより新しいローカリズムを目指す若い Lee Tonouchi や、母が日系二世で父がポルトガル系移民である Susan Miho Nunes、母が日系二世で父がハワイに駐留した白人のアメリカ GI である Marie Hara のように複数の民族的バックグラウンドを持つ作家たちのアイデンティティ追求も、広義におけるローカリズムの動きである。この様に、21 世紀のローカル文学は、文学の様々な可能性を秘めたボーダレスな世界を構築している。

II. ローカリズムへの序曲

アジア・パシフィックの様々な地域から多岐に渡る民族がハワイへの移住し、そして定住するという過程を経てきたハワイの歴史そのものが、ローカリズムを作り出す源となった。ポリネシア諸島からハワイ諸島へ移り住んだポリネシア系住民が、ハワイアンのルーツとなり、カナカ語を母語として、ハワイの文化を作り上げた。しかし、アメリカからの白人宣教師にキリスト教化され、白人プランターに土地も資源も奪われ、政治的にはハワイ王国もアメリカに屈し、そして教育の場では英語化されることにより、ハワイアンとしての

アイデンティティを失っていった。その過程で、砂糖黍王国が誕生する事により、白人とハワイアンという二項対立から多民族ピラミッド社会が確立し、ハワイのローカリズムの基盤ができあがる（タカキ 43）。

ニューイングランド出身の白人プランター達は、砂糖、コーヒー、パイナップルなどの栽培を大規模に行いハワイの豊かさを摂取しただけでなく、ハワイの社会構造を変え、現代ハワイの独自性を作り上げることになる。プランター達は、ハワイアンがプランテーションでの規則的な労働体系に合致しないため、またハワイアンの数が激減してこともあり、ハワイアンを労働者として使うことをあきらめるが、その代わりに、ヨーロッパやアジア諸国からの出稼ぎ労働者をリクルートするようになる(Okihiro 15)。ノルウェイからの移民のように定着しなかった少数を除けば、出稼ぎでやってきた多民族の労働者達の数は増え続け、家族を持つことにより定住化への道をたどる。

出稼ぎ労働者は、19 世紀前半からハワイにやってきた中国人の労働者に始まり、1870 年台から砂糖黍畑のルナとなるポルトガルからの移民が到着し、また 1880 年代にはノルウェイから労働者がやってくるが、過酷な労働条件と気候に耐えられず二隻の船で終わる。砂糖黍産業がピークを迎え、ハワイが砂糖黍王国として君臨するにつれ、大量の労働者が必要となり、1856 年には日本からの官約移民がハワイへ渡り、1880 年代には山口、広島、熊本、福岡などの県でハワイ熱が高まり、1 9 02 年には、日系がプランテーションの労働者の 73.5%を占めた。日系労働者は地方出身者が多く、経済的理由から移住を決めた者が大半を占めた。それに対して、日清戦争と日露戦争、日本の支配、宗教的弾圧または、飢饉と干ばつから逃れて 1903 年からハワイへやってきた韓国からの移植者の中には、ソウル、インチョン、プーサン、ウオンサンという都市の出身者が多かったと言われている（タカキ 70-72）。しかし、苦しい生活は母国を離れてハワイに渡った後も続いた。

> It was another long walk
> through the sugarcane fields
> of Hawaii,
> where he worked for eighteen years,
> cutting the sweet stalks
> with a machete.　His right arm
> grew disproportionately large
> to the rest of his body.
> He could hold three
> grandchildren in that arm.（Cathy Song, “Easter: Wahiawa, 1959,” *Picture Bride* 8）

最後に、ハワイ移民社会に大きな変化をもたらすのが、母国での貧富の差から逃れてハワ

イへやってきたフィリピンからの移民であった。その数は、日系を追い抜き、1922 年にはフィリピン系が 41%となり日系を上回り、1932 年には日系が 18.8%でフィリピン系が 69.9%となる（Okihiro 59）。

また、独身男性が中心であったプランテーションでは不均等の男女比が様々な問題が起こり、家族を持つことにより労働力とモラルの安定が必要とされたために、20 世紀の初頭から各母国より写真の交換で結婚を決めた写真花嫁が大量にハワイに到着し、その結果移民の定住化が起こる。ハワイでの豊かな生活を夢見てやってきた写真花嫁達は、写真でみたより年齢が上で容姿も劣る夫と厳しい生活と労働に失望した。

> What things did my grandmother
> take with her?　And when
> she arrived to look
> into the face of the stranger
> who was her husband,
> thirteen years older than she,
> her tent-shaped dress
> fling with the dry wind
> that blew form the surrounding fields
> where the men were burning the cane?　(Song, “Picture Bride,” *PB* 3)

写真花嫁の中には、結婚生活に落胆してキャンプの独身男性と駆け落ちしたり、脱走したりするものもいたが、プランテーションでの労働者として重要な役割を担ってゆく。男性よりも低い賃金で、畑を耕たり枯葉を剥ぐホレホレと呼ばれた仕事に従事しただけでなく、キャンプの独身男性の洗濯、弁当作りなどの炊事や裁縫もこなした（タカキ 118-20）。

異なる特質を持つ人種により階層別に分けた職業分担が成り立っていたプランテーションのピラミッド構造は、別々のキャンプに収容することにより、労働者が団結することを阻止するためのものであった（タカキ　116-17）。実際、移植した一世達は母国とのつながりが強く、特に移民たちの母国間で起こっている政治的葛藤が、移民にも大きな影響を与えた。日系と中国系では、1895 年の日本の日清戦争勝利により日系の母国への思いと勝利感が日系を奮い立てたと言われている。さらに、日系と韓国系では、1905 年、朝鮮が日本の保護領となり、1910 年に併合されると、韓国系労働者達は自らを政治亡命者とし、国家的独立と民族主義をかかげ、日系労働者と対立した。

このような民族間の葛藤の後、プランテーション労働者としての共通認識が生まれるのは、1841 年に始まり 1909 年と 1920 年に頂点となるストライキを契機にであった（タカキ 257-58）。それは、プランテーションの移民労働者達が、数の上ではマイノリティからマジョリティへと変化しながらも、政治的力の点ではマイノリティであったという社会構造に

メスをいれるものであった。このような民族の壁を超えたプランテーション労働者の共通意識の誕生が、広義でのローカリズムへの道を開く事になり、プランテーションという社会的・経済的・文化的な牢獄空間が、ローカル・アイデンティティのルーツとなる。

その後、第一次世界大戦と第二次世界大戦を経て、一世から二世への世代交代の中でハワイ、そして究極的にはアメリカへの帰属意識が変化し、ハワイのローカル・アイデンティティが新たな試練を迎える。第一次世界大戦では、一世の職業軍人の活躍があったが、第二次世界大戦では、ハワイ生まれの二世が従軍することになる。特に、日系の二世は、第二次世界大戦によって、アメリカへの忠誠を証明するために従軍し、ヨーロッパ最前線へ送られただけでなく、環太平洋での特別任務にも就かされ多くの犠牲を払うが、この第二次世界大戦での試練と功績により、日系二世が戦後大学へ戻り、ハワイの政界・経済界を担うことになる（菊池　157）。政治的・経済的マイノリティーであった日系が、新しいハワイのローカル社会を構築する基礎をつくりあげた。

しかし、1959 年にハワイがアメリカに合併されると、ハワイにおける Americanization が教育において加速され、特に標準英語の導入によりピジン英語が排斥されローカル・アイデンティティの喪失という危機を迎える。さらに、経済的には、アメリカの巨大資本によりハワイの観光業がハワイの顔となってゆく。ワイキキ・ビーチが生まれ、アメリカの巨大ホテルが次々に建設され、最後の楽園というキャッチ・フレーズに踊らされ、アメリカ本土からだけでなく、世界中から観光客がやってくることになる。経済のグローバル化が進んだことによりさらに急激に変貌を遂げるハワイにおいて、ハワイに暮らす人々の大多数は、一般的によく知られている一部のアジア系の成功物語に反して、コロニアル時代から代わらない貧困と暴力が内在する生活を送ることになる。このような生活を経て、三世の多くが Americanization の洗礼を受け、大学教育を受けて専門職に就いてゆく。戦後のハワイの劇的な変貌が、ハワイのローカリズムを確立させ、ローカル・アイデンティティへの覚醒をみることになる。

III.　現代におけるローカリズム構築とローカル文学の確立

1970 年代後半から 1980 年代にかけてのローカリズム構築は、ハワイ諸島の文化的・民族的誕生から砂糖黍王国における多民族変容にルーツを持ち、第二次世界大戦と戦後のハワイの劇的変遷を基礎として、大学教育を受けたアジア系三世を中心に行われた。このローカリズム探求は、ローカル文学の存在と意義を確認することに端を発し、その姿勢は現在におけるまで基本的には変わっていない。観光客やよそ者ではなく、ハワイに生まれハワイをホームとしている人々の生活をその言語であるピジン英語で描くことが、ハワイ・ローカル文学の一貫した姿勢である。

ハワイのローカル文学運動が始まったのきっかけは、1975 年にシアトルのワシントン大学大学院で勉強をしていたハワイ出身の日系三世 Stephen Sumida と Arnold Hiura がアジ

ア系アメリカ人学生の会合で出会ったことによる。その時、Sumida は博士課程でルネッサンス文学を専攻しており、Hiura は修士課程でアメリカ文学を専攻していた。当時、サンフランシスコ、ロスアンジェルス、シアトルなどの西海岸を中心にアジア系アメリカ人運動と文学活動が盛んに行われていた。その中には、戦中から創作活動をしていた二世の Hisaye Yamamoto、Wakako Yamauchi、三世の Janice Mirikitani、Frank Chin、Gary Hongo などがいた。アフリカ系アメリカ人による公民権運動から影響を受け、アジア系アメリカ人運動が盛んになり、文学においてもアメリカ文壇のメイン・ストリームから排除されてきたアジア系アメリカ人作家が団結をするようになる。そして、1976 年にアジア系アメリカ人作家会議がシアトルで開催され、上記の Chin、Yamamoto、Yamauchi、Hongo に加え、Charles Craw、N.V.M. Gonzalez、Momoko Ito、Lawson Fusao Inada、Laureen Mar、Toshio Mori、Bienvenido Santos などが出席した。そこに参加した Sumida と Hiura はその本土中心のアジア系アメリカ文壇においてハワイの文学が全く無視されていることに気付く。一足先にハワイにもどりハワイ大学で教えていた Hiura に Sumida が合流し、そこに Hara が入って、ハワイにおける文学を掘り起こし、自分達の時代のハワイ・ローカル文学を発掘し、評価し、構築するという目標をかかげて活動を始める。

Sumida、Hiura、Hara の三人は、1976 年にローカル文学運動の拠点となる Talk Story Inc.を設立し、Hawaiian Committee of Humanities から助成金を得て、活動を始める。Talk Story という名称は、ピジン英語で、“a widespread and sociable form of oral, animated exchange”という意味であるという（Sumida 240）。1977 年には、手作りのポスターを大学や町のいたる所にはり、Hiura の家で最初の集会が開かれた。彼らの心配をよそに、約 150 人ほどが集い、その中にはこの運動を受け継ぐ中国系三世の Lum と Chock もいた（Hiura Personal Interview）。この二人が中心となり、1978 年に Talk Story Conference が開催され、会議の副産物としてローカル作家の作品集 *Talk Story: An Anthology of Hawaii's Local Writers* を編纂して出版した。この第 1 回 Talk Story Conference では、二世作家の Philip Ige が運営委員長を務め、法的処置に関しては Melvin Masuda と David Hagino が助言をし、またプランテーションのデパート経営者であった Goro Arakawa からの助成を得、Talk Story のロゴのデザインを Maile Yawata が買って出るというように、文学の枠を越え、多くのローカル・コミュニティーからの力が終結したのだった（Hiura E-mail to the author）。

翌年、第二回の Talk Story Conference が開催され、1980 年には Writers' of Hawai'i Conference が開かれる。この間、上記の *Talk Story: An Anthology* から発展して、Bamboo Ridge Press が創設され、文芸雑誌 *Bamboo Ridge* が刊行された。その後、Sumida はハワイ大学からミシガン大学を経てワシントン大学の教授となり、Hiura はハワイに残り日経新聞 *Hawaii Herald* の編集の仕事を長く勤めた後にフリーとなり、現在は Mo'ili'ili Blind Fish Tank を運営しており、事実上二人は Bamboo Ridge から離れる。Hara だけがハワイ大学英文学科で創作を教えながら、Bamboo Ridge の活動と現在にいたるまで関わってきて

いる。Bamboo Ridge Press の中心は創設当時から Chock と Lum となり、ローカル作家の作品を発掘し、発表するという基本的姿勢は変わらず、2002 年の春で 81 号を迎える *Bamboo Ridge* の発行だけでなく、数多くのローカル作家の作品集を編集し出版してきた。

Talk Story Conference では、ハワイのローカル文学に携わる作家群として、すでにハワイで名声を得ていたハワイの作家 John Dominis Holt, 1940 年代から創作をしてきた二世作家である John Shirota、Edward Sakamoto、Milton Murayama、Patsy Sumie Saiki から、当時 Kapiolani Community College で教鞭を取っており *The Woman Warrior* でベストセラー作家となった Maxine Hong Kingston、ハワイではすでに歴史的小説で名声を得ていた Bushnell、母方が韓国系二世, 父方が中国系二世で日系との交流多い環境で育ち、後に東部の詩壇で認められ *Picture Bride* (New Haven: Yale UP, 1983) と *Frameless Windows, Squares of Light* (New York: Norton, 1988)を出版した Cathy Song、現在までハワイでの教育と創作活動を続ける Mavis Hara、また戦後医者としてハワイ島のヒロに渡った Jiro Nakano や Sumida の妻で後にワシントン大学教授となった Evelyn Nakano まで、多岐に渡る作家たちがいた。彼らの作品の中には、それぞれの母国からハワイへ至るまでの先祖の長く苦しい道のりが再構築され、語られることが無かった歴史、家族史、そして作家自身の自分史が内包されている。

これらの作家の中で、Murayama は当時 Talk Story に至るまでのローカル文学運動に、特にピジン英語をローカル文学に必然的な言語として使った点において大きな影響を与えた。Sumida、 Hiura、 Hara がハワイ大学に在籍中にハワイのローカル文学の確立を計画し始める前年 1975 年に、Murayama の *All Asking for Is My Body* が出版社から拒否されて Murayama 自身の San Francisco の Supa Press から自費出版された。この作品は短編として 1959 年に *Arizona Quarterly* に発表されるが、小説として出版する際には出版社の理解を得ることができなかった。この作品のタイトルが示すように、標準英語では文法的に誤りとされるピジン英語の表現が使われている。Hiura は、この作品が発表された時の衝撃は、アフリカ系アメリカ人作家が Black English を使うように、ハワイのローカル作家がハワイ独自のピジン英語を使うことにより、アメリカ本土の歴史、文化、社会と異なるローカル・アイデンティティを明確に打ち出したことによると言っている

> Tanksgiving was when you gotta learn about ta Pilgrims and all dat. Das when da Indians and da Pilgrims went get togedda, eat turkey or something. Kinda hard to believe though, yeah? Me, I like Indians mo bettah den da Pilgrims. (Lum 71)

上記の詩にみられるように、標準英語というメイン・ストリームの言語ではハワイのローカル性を表現することは不可能で、自分達にとって日常的に使ってきた第一言語、つまりピジン英語を使うことにより、ハワイという独自の文化圏が表すことができるという姿勢

も、現在まで変わることはない。

Bamboo Ridge は、その後ハワイ州などから助成金を得て、非利益団体として確立され、ジャーナルに新しい詩や短編小説を掲載すると共に、多くのローカル作家の作品集を出版してきた。編集者である Chock（中国系だが祖父の一人が日系）も詩集 *Last Days Here* (1986)を出し、自らが主催する地元の公立学校での詩の創作プログラム Poets-in-School での成果である *Small Kid Time Hawaii* (1981)を編纂した。Chock の相棒 Lum は、短編小説と戯曲を書き、*Sun: Short Stories and Drama* (1980)を出版した。同じ世代で中国系ローカルの作家では、Wing Tek Lum が *Expounding the Doubtful Points* (1987) を、Wayne Wang が *Chan is Missing* (1984)を出版している。Nunes の *A Small Obligation and Other Stories of Hilo* (1982)や韓国系の Ty Pak,の *Guilt Payment* (1983)も出版される。異色な例では、Jiro Nakano は日系一世が日本語で残した短歌を英訳して *Poets Behind Barbed Wire* (1985)もローカル文学のルーツという観点から評価され世に出た。Hara や Nunes と同世代でありながら遅くに創作を始めた Juliet S. Kono は、Bamboo Ridge の集まりを通じて Song と親交を深め、Song から助言を得て詩作に励み、詩集 *Hilo Rains*(1988)を出版する。

Bamboo Ridge Press は、1980 年代にこのように多くの無名のローカル作家による作品をジャーナルに掲載し、さらには彼らの作品集を世に出した。そこには出版するという活動を超え、互いに影響を与え合い、創作活動を支援する活動が生まれ、Bamboo Ridge Community が確立することになるのである。

III. 1990 年代以降のローカリズムの変遷

1990 年代は、1980 年代以降からジャーナルに発表されてきた作品が続けて Bamboo Ridge Press から出版される一方で、新しいローカル文学の動きが活発となる。長く Bamboo Ridge に関わってきた Lum が二作目 *Pass On, No Pass Back!* (1990)を、Hara が長い間書きためてきた作品をまとめて *Bananaheart and Other Stories* (1994)を、そして Jiro Nakano が日本の原爆詩人の作品を英訳した *Outcry from the Inferno: Atomic Bomb Tanka Anthology*(1995)を Bamboo Ridge から出版する。

1990 年代に入るとローカル文学が確立し、*Bamboo Ridge* がハワイの作家たちの登竜門となり、新しい作家達が Bamboo Ridge Community から誕生し、若い層の三世や多文化を共有する Hapa、または戦後の新しい移民の子弟などが文学活動に入ってくることで、ハワイのローカル文学が文化的に複合的・多岐的となる。その多岐性は、ポスト・コロニアル時代における個々の民族的バックグランドへの回帰、グローバル化して肥大となったホノルルに対するハワイ諸島の中のローカリズム発掘、そしてさらにハワイを発信源とするローカル文学のグローバル化という特質を持っている。

カナカ語を復活させ、ハワイアンの神話と現代ハワイアンの生活を融合した新しいハワ

イアン文学が、Leialoha Apo Perkins や劇作家 Victoria Nalani Kneubuhl たちの手で作り上げられる。ローカル文学の運動の中心がアジア系であったため、また文学を目指すゆとりがアジア系にあったため、さらにハワイにおけるマジョリティーがアジア系であったため、ローカル文学の担い手がアジア系で占めていた。しかし、その中で、すたれてゆくカナカ語を英語の中に取り入れ、ハワイの神話の意義を問い直し、さらにコロニアル、ポスト・コロニアル時代を通じて社会的、経済的、文化的、法的、宗教的、言語的に抑圧されてきたハワイアンの歴史を背景に作品を構築することにより、ハワイアンとしてのアイデンティティを確立させようとしている。このハワイアンの文学運動も、Bamboo Ridge の中で育ちローカル文学の重要な要素となり、ローカル文学の複合性と多岐性を支えている。

ハワイから本土に向けての発信も活発になり、ハワイ出身の詩人や作家が本土の大手出版社や大学出版から作品を次々に出すことにより、ローカリズムのグローバル化が起こる。ハワイをバックグラウンドに持ちながらも、本土で創作活動をおこなう Hongo が詩集 *Yellow Light*(Middletown: Wesleyan UP, 1982)や *The River of Heaven* (New York: Knopf, 1988)、エッセイ *Volcano: A Memoir of Hawaii* (New York: Vintage, 1995)を、Sylvia Watanabe が *Talking to the Dead and Other Stories* (New York: Anchor, 1992)を大手の出版社から詩集を出し成功をおさめる。本土で教育を受けハワイに戻ってきていた Song は、Bamboo Ridge Community で指導的や役割を果たし Kono と共に *Sister Stew: Fiction and Poetry by Women* (1991)を編纂して Bamboo Ridge Press から出版しながら、自らの創作も活発に行い続け *School Figures* (Pittsburgh: U of Pittsburgh P, 1994)を、さらに東本願寺派の影響を受けて *The Land of Bliss* (Pittsburgh: U pf Pittsburgh P, 2001)を発表する。Song の世界観は、ローカル経験を基盤として、異なる文化に接し仏教の教えに触れることによりユニバーサルになる。

また、Chock や Song の支持を得て Bamboo Ridge で育ち詩集 *Saturday Night at the Pahala Theater*（1993）で性をテーマに過激なピジン英語を披露した若手の作 Yamanaka や Yamanaka の理解と助言で Keller が大手の出版社から小説を出したりした結果、ハワイのローカル文学がより多くの読者を相手に表現する時代が到来する。Yamanaka は、小説家としての道を歩むことになり、1960 年代のヒロを舞台に思春期の少年・少女の友情と葛藤を描いた *Wild Meat and the Bully Burgers* (New York: Harvest, 1996)を出版する。しかし、その後に発表した *Blu's Hanging* (New York: Farrar, 1997) が、フィリピン系を性犯罪者とステレオタイプで描いているという点で民族差別主義者と批判され、アジア系アメリカ学会においても受賞が取り下げられる。しかし、Yamanaka は社会問題にまで発展した傷を乗り越えるかのように、*Heads by Harry* (New York: Farrar, 1999)、*Name Me Nobody* (New York: Hyperion, 1999)、*Father of the Four Passages* (New York: Farrar, 2001)と立て続けに作品を発表し、ポスト・コロニアル時代に存在する性のコロニアリズムを本土に対してのローカルであるハワイ諸島の中のローカルであるハワイ島を軸にピジン英語を駆使し、一貫して民族差別や性差別に反対する立場を明確にしてきている。

また、ローカル社会が必ずしも連帯のみに支えられてきたわけではなく、ローカル社会を構成する多民族間の葛藤の繰り返しがローカリズムへの軌跡である点も、ローカリズムの多岐性を知る上では重要である。砂糖黍プランテーションの産物である多民族の中でのコロニアニズムに焦点をあてることにより、ハワイのローカル性に秘められた民族間の葛藤を描く作品も出てくる。韓国系三世 Gary Pak は Bamboo Ridge から出した *The Watcher of Waipuna and Other Stories* (1992)においては、自らが育った多民族が共存する労働者階級のローカル・コミュニティーを描いた。しかしその後、韓国系の家族や民族の歴史に目覚め、*A Ricepaper Airplane* (Honolulu: U of Hawaii P, 1998)においては、韓国からの移民の歴史を年老いた韓国系一世の男性の一生を通じて、母国への日本侵略、満州での過酷な労働と生活、ハワイでのサトウキビ畑での苦難、そして民族主義への覚醒、さらには韓国帰還の夢という時空の旅を描いた。

Yamanaka の作品に見られるように、ハワイ諸島の中に存在するローカリズムとコロニアニズムは Bamboo Ridge の活動はホノルルが中心であるが、ローカル作家達は、ハワイ諸島にまたがって活動している。その中で、ハワイではホノルルに次ぐ第二の都市ハワイ島のヒロは、砂糖黍のプランテーションにより発展し、多くの作家を生み出して来た。Hara と同年にヒロの高校を卒業した Kono は、第二作 *Tsunami Years* (1995)に顕著にみられるように、故郷ヒロの人々が一世から抱えてきた苦難をヒロの風土、雨、津波(“tsunami”)という自然との戦いをメタファーとして描いてきた。1946 年の津波にのみ込まれたヒロの Laupahoehoe School の犠牲者に捧げる詩において、中国の民話をもとにして書かれた児童文学書 *Five Chinese Brothers* をモチーフに “If I could, I'd have stretched my legs into stilts / like the third Chinese brother / and plucked you from the sea” (68)と故郷の歴史を自らの心理的な空間に置いている。Kono のヒロでの小学校の同級生である Nunes,は、ハワイのローカル性の新しい側面である Hapa の先駆者としてヒロの生活を描く短編小説からハワイの初等教育用教科書副読本まで出版してきている。

ヒロという空間と同様にポスト・コロニアル時代に再構築されるコロニアニズムの顕著な例として、ハワイの Hapa があげられる。もともとハワイ語で hapa haole として使われ白人とハワイイアンの血がはいっていることを意味したが、現代に至るまでに様々なケースに使われるようになった。異人種との婚姻がタブーであったプランテーション時代の人種別に隔離された空間から禁断の恋や強姦により Hapa が誕生し、ハワイの歴史的変遷とともに様々な文化的コンテクストを持つ Hapa がそこに加わり、現代ハワイにおいては Hapa が若い世代を代表するようになってきた。Hara が “Racism, even in self-hatred, still exists for many who are of mixed race, even after a myriad of global social changes” (14)と述べているように、Hapa への偏見は強くあるが、同時に白人の血が入っている場合エキゾチックで美しい Eurasian というレッテルを貼られ、賛美されることもあった (Hara 12; Keller, “Circling 'Hapa'” 19)。しかし Hapa が現代ハワイの文化的表象であり、その独自性を表す一つの特質であるという認識が、、Hara、 Nunes、 Song、 Keller などのロー

カル作家に芽生え、ローカル・アイデンティティの再確認が行われた。

19 世紀に移住してきた一世をルーツに持つハワイのローカルに、第二次世界大戦後にハワイに移り住んだ移民が加わり、その文化・歴史的なバックグランドがローカリズムをより豊かにする。その中には、朝鮮戦争の際に韓国人の母とアメリカ人ＧＩの父のもとソウルに生まれ、家族でハワイに移り住んだ Nora Okja Keller がいる。民族と性のコロニアル時代の子として Keller は、“I smelled like garlic, like kimchee, like home”(“A Bit of Kimchee” 296)と言っているように自分に染みついている韓国というものを全て否定した時代から、そのルーツの持つ独自性を表現する作家へと変貌を遂げる。Yamanaka の助言を受けてエイジェントがついた Keller の処女作 *Comfort Woman* (New York: Viking, 1998)は、従軍慰安婦という第２次世界大戦中の民族的および性的抑圧を、独特な女性のナラティブにより描いた。また、第二作の *Fox Girl* (New York; Viking, 2002)においては、自分自身をも含め韓国系のアメラジアンのルーツを探る旅に出るかのように、アメリカ兵が韓国女性を求めて集まるアメリカ村を舞台に、朝鮮戦争時の韓国における性の政治学と韓国の民話を融合させた世界を構築した。

1990 年代以降のローカル文学は、1970 年代から 1980 年代にかけて構築された基盤に、コロニアニズムとポスト・コロニアニズムの共存する現代ハワイが骨格となり、そこにローカル社会が抱える複雑で多岐に渡るテーマが肉付けされている。経済のグローバル化が進みバブル経済が終焉を迎えることにより運命が変わる現代ハワイにおいて、それと逆流するかのように一貫して変わらないローカル性へ固持する姿勢が発展してきている。

現代ハワイのローカル文学は、繰り返し訪れてきた文化変容の中で生まれ、育ち、そして実を結んだ。現代ハワイにおける多民族文学は、今後も、ハワイという地理的に孤立した空間が経験してきた歴史が新しい経験と解釈に邂逅することによって、より多岐的かつ重層的に空間を構築してゆくだろう

＊この原稿は、韓国大田韓南大学校で開催された 2002 年度韓国日本文化学会春季国際学会大会において発表した講演原稿に加筆・修正を加えたものである。

参考文献

Chock, Eric, James R. Harstad, Darrell H. Y. Lum, and Bill Teter, eds. *Growing Up Local: An Anthology of Poetry and Prose from Hawaii*. Honolulu: Bamboo Ridge, 1998.

Hara, Marie Murphy. “Negotiating the Hyphen.” Hara and Keller 9-16.

Hara, Marie, and Nora Okja Keller, eds. *Intersecting Circles: the Voices of Hapa Women in Poetry and Prose*. Honolulu: Bamboo Ridge, 1999.

Hiura, Arnold. E-mail to the author. 24 April 2001.

---. Personal Interview. 18 April 2001.

Keller, Nora Okja. "A Bit of Kimchee." Chock, Harstad, Lum and Teter 295-99.

---. "Circling 'Hapa.'" Hara and Keller 17-24.

Kono, Juliet S. "School Boy from Up Mauka." *Tsunami Years*. Honolulu: Bamboo Ridge, 1995. 68-69.

菊池由紀 『ハワイ日系二世の太平洋戦争』厚徳社、1995。

Lum, Darrell H. Y. "Giving Tanks." Chock, Harstad, Lum, and Teter 71-74.

Okihiro, Gary Y. *Cane Fires: the Anti-Japanese Movement in Hawaii, 1865-1945*. Philadelphia: Temple UP, 1991.

Song, Cathy. *Picture Bride*. New Haven: Yale UP, 1983.

Sumida, Stephen H. *And the View from the Shore: Literary Traditions of Hawaii*. Seattle: U of Washington P, 1991.

タカキ、ロナルド 『パウ・ハナ： ハワイ移民の社会史』 富田虎男・白井洋子訳 力水書房、１９85 （Ronald Takaki, *Pau Hana: Plantation Life and Labor in Hawaii, 1835~1920*, Honolulu: U of Hawaii P, 1985）